

KISS & ICK

- *s t o r y* -

shiroa

序

物語は”∞”に紡がれる。

物語はそれ自体が生まれようと意識したかのように生まれる。

生まれる瞬間、閃きと称される火花が散る。

それはあまりにもまばゆい。また、スプライト（妖精）のように捕らえにくい。

また、おどろくほど偶発的に、生まれる瞬間が訪れる。

求めている、いないに関わらず。いつでも。

そんな”∞”に生まれる物語の種を、私は手をかけ、芽が出るまで大切に水をやる。

そして芽が出れば日差しに気を配り、風を避け、適度に水を与えながら育てる。

実に神経をすり減らし、情熱を傾け、やがてようやく花が咲く。

その花の美しさは、手がけた手間に比例してまばゆい。

——そんな私が手をかけ、大切に育てた物語の咲かせた”花”たちの姿をごろうじ召されよ。

時にそれは物語の生まれた瞬間を映し、

時にそれは物語の育った側面を映じよう。

では、しばしの旅を。

waning gibbous

太古の昔より、月は力を持っていると信じられてきた。
科学でも、潮の満ち引きには月の引力が関係すると言われている。

しかしまだ、解明されていない不思議な力がありそうだ。

”十八夜の月”を英語では”waning gibbous”という。
なんとなくカッコよい響きだが、直訳するとそれは”蒼褪めた天体”となる。

それを知り、冷やりとした。

月にはうさぎが住んでいて、とか。そういう可愛い話ではなく。
なんとなく嫌な予感をはらんでいる気がした。

”蒼褪めた天体”が照らす夜、過去に何かおぞましい出来事でも起きたのだろうか。
それとも、何かがこれから起きようとしているのか……。

――薄暗い月夜に、二人の男が狂気のゲームをはじめようとしている。

「社会人たるもの、手帳を持たねばならない」

なんでそんなこと、押しつけられないといけない？

僕はそんなものいらない。嫌いなんだ、決まった予定を、予定通り歩くのって。

つまらないオリエンテーリングみたい。

仕事を行うのが目的なはずなのに、チェックポイントをこなすことが目的に感じ、曖昧になる。

もしこれから10年間の予定が、分刻みで決まっていたら。

すごく恐いし、そんな人生面白くない。

もちろん、予定通りにはいかないだろう。途中で大切な用事が割り込むだろう。

そしたら、恐ろしいことが起こる。

割り込んだ時間、できなかったことを修正して他の時間に組み込もうとするんだ。

ねえこれって、呪詛じゃない？

「仕事の予定を忘れないために、きちんと手帳につけておきなさい」

総務部長は入社式でそう言った。

なかば強制的に僕は、手帳を買わされた。

一年後、その手帳には、何が書かれているだろう。残されているだろう？

それは予定か、呪いか。

あなたの手帳には、何が書かれているだろうか。

——こんな噂話を聞いた。

ある女の子は、カレンダーに10年間の予定を書き込んだらしい。

それを聞いた時、僕は背筋が寒くなった。

どんなことが書かれているのだろう、想像するのも怖いくらい。

.....僕にはそのカレンダーを見る勇気は、ない。

廃屋

ある山奥に不自然にできた集落がある。
わずか6軒ほどの家が建つ分譲地。
どうしてここに家を建てたのだろうか、その理由は分からない。

市はきちんとインフラを施し、水道、電気などを引いていたようだが。

人里離れた場所に住む人たちは、村を追われた人たちを連想させる。

――昔、ある村があった。
村はそれ自体が生活共同体であり、隣組では助け合いが当たり前であった。
だから、その中で村の規律を守らないものは、仲間外れにされる。
悪いことをすると、その共同体から外される。
村八分、という言葉はそこからきているらしい。

一分は結婚、一分は葬式。それ以外は一切関わりをもちませんよ。
そういうことらしい。

そんな村を追われた人たちが、少し離れた場所で、自分たちの小さな部落を作る。
その部落は栄えることもあるだろうが、消滅することもあるだろう。

現代に生まれた、閑散とした空き家が並ぶ分譲地。
この場所でも、人が消滅した。
そして、そこは有名な心霊スポットとなった。

廃屋には小さな歴史がある。そこには悲しい歴史があるかも知れない。
面白半分で足を踏み入れてはいけない。

心霊スポットへ赴く際には、
ゆめゆめ、お気をつけなされるよう。

――長編小説とは、短編小説の連続である。

真に優れた長編小説は、ぱらりとめくったページ、どこを読んでも面白い。
それは物語の筋とは関係なく、そこに魂が込められて書かれているからだ。

魂が込められた文章は、切り抜いた一文にすら哲学が含まれ、考えさせられる。

私の長編小説はこの考え方に従って作られている。
筋が分かるからつまらないとか、オチがわかったから面白くないとか。

真に面白い小説はオチがわかっていても面白い。

事実、名作は何度も読み返される。
また、読み返すたびにあらたな発見があり、感動がもたらされる。

そういう作品を書けるようにならねばならない。

――過去、幾度かチャレンジし、失敗してきたが。
ようやく習作にしてひとつの完成系が出来上がった。

はじめの一行から、最後の一行まで。
魂を込めて書かれた渾身の一作を、世に問おう。

吸血鬼

ブラム・ストーカーの幻想は恐ろしく耽美的で、おぞましい。
そして、その幻想はただの妄想ではなく、現実と地がつながっている。

吸血する。血を食料とする行為は決して不思議なものではない。
ヒルや蚊のように、それを食料とする生物がいる。
血液は高カロリーで栄養が豊富であり、だからこそわれわれの体中に張り巡らされ、行動する活力を与え続けている。
生れてからずっと、休むことなく。

赤子は母乳を飲む。母乳は血液から作られる。

人は生まれた時から吸血鬼だった。そう言えなくもないわけだ。

ブラム・ストーカーの幻想はそれだけではない。

日光に弱い。これは紫外線の有毒性を示唆する。
たびたびこの紫外線に耐性のない児が生まれることがある。

銀の銃弾で撃ちぬくと消滅するとか。
銀食器でも知られるが、銀には殺菌効果がある。
元来、病は寓話として怪物に例えられ語られる。
病の元となる病原菌を銀が殺菌するということは、吸血鬼も殺せるかも知れない。

フランケンシュタインが生み出すクリーチャー（怪物）の物語も、その奥には科学の裏付けがあった。

ブラム・ストーカーは、ブラド・ツェペシュ（串刺し公）という歴史上の人物を俎上にのせながら、鮮やかに医学、科学の禁忌に踏みこんだ幻想で紡ぎあげた傑作を残した。それが『ドラキュラ』だ。

耽美的でエロティックな吸血鬼幻想は、あらゆる軸の可能性を示唆し、さらに多くの物語を誘発させる。

――これは、その一部だ。あくまで、一部に過ぎない。

セレクション

――とある対談。

shiroa：いよいよ始まりますね、国を挙げての大イベント。

大瀧：ええ、今後の日本を活気づける秘策ですよ！

shiroa：今回のテーマはエコ。エコロジーということですが、一体これはどういうことなんですか？

大瀧：いやぁ、まだその種明かしは残念ながらできません。本当は言いたくてうずうずしてるんですけどね（笑）。

shiroa：わたしも今回のイベント、実に楽しみにしております。なにせAクラスに選ばれれば1000万円いただけるんですものね！

大瀧：はっはっは。反対派の説得には苦労しました。国庫が火の車の中、無駄な税金が出せないってわけです。けれども最終的には合意いただけました。つまり、これは有意義な投資であると解釈いただけただけです。

shiroa：お尋ねしたいことは多々ありますが、まず今回のイベント、『セレクション』の概要について教えて下さい。

大瀧：現段階ではお答えできることも少ないんだけどもね。言える範囲でお答えしましょう。このたび全国一斉に行われるテスト、『セレクション』は国民の皆様を対象として行います。1億2千万人全員をいっぺんにテストを行うのはどだい無理な話ですので、今回はこちら側で任意に選出させていただきました。選出された方のお宅には封書が届きますので、楽しみに待って下さいね。

shiroa：あの～、私も参加できる可能性があるってことですね。

大瀧：もちろんですよ。国民全員がその可能性があるわけです。そして、その選ばれた方たちは指定の施設へテストを受けに行ってください。テスト、といってもゲームのようなものです。気楽に受けて下さい。イベントを盛り上げるために各界の著名人、アイドル、ミュージシャンも喜んで協力してくれる話となっています。運のいい方は、直にアイドルと会えるチャンスがあり

ます。

shiroa : もしかして、あの国民的アイドルの……。

(静かに大瀧へ耳打ち)

大瀧 : はっはっは。来ますよ！

shiroa : 本当ですか！ ……失礼しました。つい、仕事を忘れてしまいました。あの、もし選出されなくても会場に遊びに行ってもいいんですか？

大瀧 : それはご遠慮いただいております。テストを行う方たちの妨げになりますので。混乱なくイベントを遂行するためにも、ご協力をお願いいたします。

shiroa : 時間となりました。まだまだお聞きしたいことはありますが、本当に楽しいイベントですね！ 私も大成功することをお祈りしております。

大瀧 : ありがとう。私も大成功させたら、ゆっくり休ませてもらおうと思うよ (笑)。

shiroa : 本日はどうもありがとうございました！

山の中へ埋めるということ

ニュースを見ていると、実に痛い話が聞こえてくる。
人を殺しちゃいました、山に埋めました、とか。

まず、事件を起こしちゃいました。
これはわかる。事件は起きる。
聖人君子のような、素晴らしく仁徳のある方であっても、事件は起こす。
お坊さんも起こす。
人間なら皆、起こす可能性がある。

一生懸命ごまかそうとしました。という行為。
これもわからないでもない。今現状の自分を守ろうとする。
現状を維持しようとする。その為には事件が明るみになってはいけない。
ましてや、自分に嫌疑がかけられるようなことがあってはいけない。

あらゆるものが崩壊し、面倒なことが起きる。

もし、見つからず、そっとしておけば。
自分の人生は何事もなかったように、これからもつながっていくのではないか。

人の心は弱い。
だからこそ頼るし、祈る。ここまでは理解できる。

問題はその後の処理だ。

事件を起こした際の脳はパニック状態にあり、正常な思考は不可能だろう。
だからこそ、事件後の犯人が行う”処理”は常軌を逸するのだ。

ニュースキャスターは呆れたような声で「どうしてこんなことを……」と云う。
もしそのニュースキャスターが加害者の立場となったとき、どんな模範的な態度をとってくれるだろうか。
たいがい、自分がリポートする犯人と同じような行動をとるのではないだろうか。

理解しがたい行為だが、起こりうるし他人事ではない行動。
しかしその”行為”の最中、どれだけ加害者は痛みを受けているだろうか。

人の死体をどうにかして誤魔化そうとする。

その作業自体がすでに、"罰"とも云える。

――真夜中の山の中で、スコップで土を掘り返す音が聞こえる。

疲労困憊した男は、このあと運命に絡められた"裁き"が訪れることを、

まだ知るよしもなかった。

ぷれみあむみにっつ

ある日誰かが言っていた。

人生を生きていると、その時のために自分が存在したんだと実感できる”時間”がある。

それを、プレミアムミニッツと呼ぶ。

人はそれぞれ生きることの意味を問い、悩みながら生活している。

その答えはこの”プレミアムミニッツ”にある。

しかしただ平凡に生活しているだけでは得られない。

夢を追い、努力した人にだけ、その”極上のひととき”は訪れる。

”だから、夢を追い、生きよ。”

いつか訪れるプレミアムミニッツを求めて。

<登場人物>

隼人 : 主人公。朝起きたら変な電話が掛かってきて、変な奴らに追われることになる不幸な男。会社員。

美優 : 隼人の幼馴染。隼人から100回以上告白されるが、すべて断り続けている。OL。

パンダマン : 主人公をの逃亡を手伝う謎の男。無職。

カエルマン : 主人公を追う謎の男。塗装業。

タコ頭 : カエルマンと共に主人公を追う。気が弱く、無口。

シューター : 銀玉パチンコの名手。射撃の腕は超人の域を超える。本物の銃は使わない。

ハカセ : とにかく何でも発明する天才。名前しか登場しない。

タコヤキ : 腰に差している長い金属製の箸を武器に、主人公に襲い掛かる。たこ焼き屋でバイトしている。

エロス : 本物の銃を使う、殺し屋。昼は板金屋をやっている。別にエロくはない。

サカナ : 超人的な嗅覚を持つ男。いつも生臭い臭いを漂わせているわりに、香道に通じている。魚市場で働く。

弁慶 : 弁財天を崇拜する長命寺のお弟子さん。腕っ節がめっぽう強い。レーザーディスクが宝物。

上司 : 隼人の直属の上司。名前の設定はない。頭は禿げていて、よく光を反射させる。

その他エキストラ少数。

.....こんな個性的なキャラクターが織りなす、カッコよくて(?)ナンセンスなハチャメチャ逃亡劇。

『ぷれみあむみにつつ』、は～じま～るよ～！！

人間は極限状態に住んでいる。
それが日常であり、普通のことなのだ。

空気には”酸素”という猛毒が、太陽からは”紫外線”という有害な光線が飛来する。

進化の過程からであろうか、人はそれを克服してきた。
また、それらを利用してきた。

しかしその防衛能力が欠ける児が時々生まれてくる。
腕の無い児が生まれてくるように、太陽光に耐性の無い児が生まれる。

それをアメリカでは”ムーンライトチャイルド”と呼ぶ、らしい。
テレビでの情報、十分に信憑性は……無い。

が、夜中に遊園地でいきいきと遊ぶ子供たちのその映像は、私に切なさをもたらした。
そして疑問が浮かんだ。

太陽が無くなれば、月は見えなくなるのに。
どうして、月明かりの下では平気なのだろう？

月は子供たちをこんなに明るく照らしている。
太陽の毒気は浄化され、優しい光がそそがれている。

それは拒絶された存在を、認め受け入れるような優しさ。そう私には感じられるのだ。

結

旅の終わり。それは次の旅のはじまりでもある。

物語はこれからも生まれ続けるだろう。

花が立体であるように、物語も角度を変えれば見え方、解釈が変わる。

気に入った花があれば、何度も愛でていただきたい。

それが新たな命を吹き込み、花の寿命をながびかせてくれる。

”K I S S I C K”

”無限”に続く終わりのない回廊。

私はそこに迷いこんだ一羽の鳥。

共に歩んでくれる人がいれば、これほど心強いことはない。